

研究代表者 所属・職：看護学部・准教授

氏 名：渡邊 亜紀子

研究課題名：『学生主体活動型地域サロン』開設に関するニーズ調査と基盤づくり

研究の目的

本プロジェクトが対象とする東海市は、『健康寿命日本一』を目標に、健康の大切さの啓発、生涯を通じた運動習慣づくりの推進、健全な食生活の推進、高齢者をはじめ身近な地域における活動などへの支援を目標とし、活動に取り組んでいる。その背景には、東海市が抱える『メタボリックシンドローム該当者が多いこと、肥満度 20%以上の児童・生徒の割合の増加』の課題があるといえる。地域住民自身が健康の大切さを認識し、望ましい食事や運動習慣づくりに取り組むことが必要であると考え。しかし、長年の食生活や運動習慣を変えることは難しく、変更するきっかけや動機が必要となる。そこで、大学で教育・学習している知識を、地域住民の『健康寿命日本一』を目標とした活動に活かすことができるのではないかと考えた。

そこで、本プロジェクトの初年度である 2017 年度の実践として、東海市の地域住民と日本福祉大学の学生が交流する場を設けること、東海市の地域住民の日常的な活動の把握、地域住民の抱える問題の把握を行うことを目的とした。また、本プロジェクトの実践を単一学部の学生が実施するのではなく、社会福祉学部と看護学部の学生が協同して活動することとした。その理由は、医療の現場が病院から在宅にシフトし、医療・保健・福祉に関わる人々が連携なくして対象を支援するこ

とは皆無であることによる。そのためには、WHO や数々の研究発表において、多職種連携教育 (Interprofessional Education : IPE) が効果的であり、学生が学部教育の中で多職種連携について学習する必要性とその効果が述べられている。

以上より、本プロジェクトと初年度の実践目的を以下のとおり掲げた。

【本プロジェクトの目的】

東海市の地域住民と日本福祉大学の学生が交流することで、地域住民が抱える課題に取り組み、健康づくり・生きがいづくりを、導き出す場の基盤づくりを行う。

【本研究の目的】

学生主体活動型地域サロンを社会福祉学部・看護学部の学生が協同して企画・実施した体験から、学生が学んだことを明らかにする。

プロジェクト目標の達成状況・成果内容

2017 年度は、①地域で活動しているサロンに、学生が企画したサロンを持ち込み、地域の人々と交流する、②社会福祉学部と看護学部の学生が協同する体験からの学びを明らかにすることを目的に、表 1 に示す通り活動を行った。以下に、1) 『学生主体活動型地域サロン』の実績と、2) 2 学部で協同し、サロン活動を体験した学びについてフォーカス・グループ・インタビューを行い明らかとなったこと、について述べる。

表1 2017年度『学生主体活動型地域サロン』に関する活動内容

時期	活動内容	活動目的
4月20日	地域サロンに興味を持っている学生の顔合わせ	・参加学生の自己紹介を行い、一緒に活動するメンバーを知る。 ・本取組の目的とスケジュール概要を知る。
5月11日	第1回合同ミーティング：東海市で実施されているサロン紹介 サロン見学の場所検討、今後の活動計画	・東海市で開催されている活動候補サロンの概要説明を受ける。 ・サロン見学の場所と予定を決める。
5月末～6月	地域で開催されている3つのサロン見学（計6回）	・実際のサロンがどのように企画・運営されているか見学、実施者から聞き取りを行い、学生企画に活かす。参加者に、どのようなサロンを期待するか聞き取りを行い、企画内容の参考にする。
7月8日	第2回合同ミーティング：サロン見学の共有、グループ分け、学部紹介	・自分が見学した以外のサロンについて知る ・これから協同する学生が所属する学部について、学習内容・学生生活・将来の夢について知る
7月～8月	グループで学生主体活動型地域サロンの企画	・学生企画サロンを円滑に進めるための準備を行う
8月27日	第3回合同ミーティング：企画内容の具体化、発表	・企画しているサロンについて発表し、他のグループメンバーから意見をいただき、今後のサロン準備に活かす
9月	グループで学生主体活動型地域サロンの準備	・学生企画サロンを円滑に進めるための準備を行う
9月21日	ゲスト講義（多職種連携について：事例検討）	・多職種連携の必要性を知る ・事例検討を行うことで、他学部の強みを知る
10月7日・8日 11月2日(2箇所)	学生主体活動型地域サロンの実施	・これまで準備してきた活動を発揮する
11月23日	グループインタビュー（データ収集） 第4回合同ミーティング：『学生主体活動型地域サロン』での学びの共有	・活動してきた内容について語り、学んだこと、大変だったことを共有し、今後の課題・対策案を共有する（学部内） ・全員で活動内容を振り返り、学びを共有する。 ・協同したことで知った、他学部の強みを発表し、お互いが持ったイメージを共有する。

1) 『学生主体活動型地域サロン』の実績

本プロジェクトの参加学生が、見学を行って得たサロンの特徴や開催日時等を基に、4つのグループに別れ、活動するサロンの企画・実施を行った。活動実態は、以下の通りである。

2017.10.7（土）10:00～11:00 <u>「マミー平島カフェ」</u> テーマ：楽しく健康に関する知識を身につけよう!! 学 生：社会福祉学部2名・看護学部2名 参加者：地域住民23名・子ども会10名 企画内容：生活に役立つクイズ、音楽に合わせて体操、風船バレーゲーム	2017.10.8（日）13:00～14:00 <u>「大池健康交流の家」</u> テーマ：脳を動かそう 学 生：社会福祉学部2名・看護学部3名 参加者：地域住民18名 企画内容：〇×クイズ 連想ゲーム
2017.11.12（日）13:00～14:00 <u>「大池健康交流の家」</u> テーマ：ポストカード作り—秋について— 学 生：社会福祉学部2名・看護学部2名 参加者：地域住民20名 企画内容：ポストカード作り	2017.11.12（日）13:00～14:00 <u>「ケアラズカフェ日向家」</u> テーマ：地元の大学生とお楽しみ会 学 生：社会福祉学部3名・看護学部1名 参加者：認知症患者の介護者等7名 企画内容：歌肩たたき、作品づくり

サロン（カフェ）の参加者は、殆どが20名前後であり、高齢者であった。一部、高齢者と子どもが交流することを目的としており、地域の子供会の児童の参加もあった。また、一部、認知症の介護をしている家族を対象とした場所があり、参加者の人数が少ないサロン（カフェ）もあった。

企画内容は、クイズ等で頭を動かすと、作品を作成するの、2通りであった。

2) 2学部で協同し、サロン活動を体験した学び

全ての『学生主体活動型地域サロン』を実施し終えた後に、本プロジェクトに参加し「学生が協同したこと」「地域サロンを企画・実施した」体験からの学び・感想について、社会福祉学部・看護学部と、在籍学部別の2グループに分けたフォーカス・グループ・インタビューを行った。インタビューの参加学生は、『学生主体活動型地域サ

ロン』の準備に半数以上と（もしくはかつ？）サロン実施当日に出席し、インタビューの参加に協力が得られた社会福祉学部 9 名、看護学部 7 名であった。

作成した逐語録のインタビュー内容を研究者個々で精読し、学生が協同して企画・実施した体験からの学びとして 196 の『コード』が抽出された。それらの類似性と相違性を 3 名の研究者で検討した結果、体験からの学びは「肯定的内容」「否定的内容」「改善点」「今後の示唆」に分類できた。また、学部別の相違性と時系列による変化に注目し、『コード』の類似性と相違性を検討した結果、30 の《サブカテゴリー》から成る 13 の＜カテゴリー＞が導きだされ、それらは【サロンの学び】と【協同学習の学び】に大別された。

【サロンの学び】は、表 2 に示すように 91 の『コード』、16 の《サブカテゴリー》、6 の＜カテゴリー＞が抽出された。学生の多くは、サロンについて全く知らない状態で、本プロジェクトに参加していた。サロンを見学することで『サロンについて初めて知った・サロンがどういうことをしているか、分かった』と語っており、「《サロンが何をやる所かを知る》《身近にサロンがあることを知る》経験から、＜サロンと出会う＞体験をしていた。また、『サロンに来る人のニーズやサロンの抱える課題を、事前に掴むことが難しかった』等、「《サロンの企画を経験する》」ことで分かることや、『高齢者やサロン参加者が、（企画内容の）どこまでを理解できるか予想するのが難しい』等、「《サロンの企画に関わる困難を体験する》」等、それまで知っていたサロンと異なる＜サロンの側面を知る＞体験をしていた。更に、サロンを実施することで、『クイズの間に答えを出して盛り上がった時に、どこできればよいか分からなかった』等、「《地域の人々と交流し反応を得る》」ことでの学びや、『企画に参加しない人を想定した配慮ができていなかった』等「《知らないサロンの一面を

知る》経験から、＜サロンを知り当惑する＞体験をしていた。一方、「《参加者に寄り添った企画を行うことが大切だと感じる》」等、「＜サロンの意義を見つける＞」ことができるほどサロンの学びが深まり、「＜新しいサロンを提案する＞」ことができていた。

【協同学習の学び】は、表 3 に示すように 105 の『コード』、14 の《サブカテゴリー》、7 の＜カテゴリー＞が抽出された。

本プロジェクトに参加する前、両学部のメンバーは夫々、お互いの学部やメンバーのことを知らず、社会福祉学部の学生は「《看護学部への偏見がある》」状態で出会い、『お互いを知らない状態で企画を進めていくことが大変だった』と「《お互いを知らないことへの不安がある》」一方、『社会福祉学部は、地域の特徴を捉え、参加者の特徴を考えることがうまい』と「《お互いの強みを知る》」経験をし、「＜メンバーの側面を知る＞」体験をしていた。また、サロンの企画を進めて行く時、『距離や、授業時間、曜日の違いで、集まって話す機会が限られていた』と「《協同する作業時間確保の難しさを感じる》」経験や、『役割分担して（サロン）当日持ち込むことにしていたが、お互いの進捗状況がわからなかった』と「《情報共有の難しさを体験する》」経験をし、「＜協同体験に当惑する＞」体験をしていた。しかし、そのような中でも、企画を進めていく必要があり、『個人で作って持ち寄る場合は、LINE で連絡を取ると効率的かもしれない』『LINE で連絡を取っていたが、やっぱり直接あって話し合っただけの方がやりやすいと思ったこともあった』と「《SNS を有効に活用できる》」《SNS を利用し限界を感じる》」等、様々な方法を試し・試み、「＜協同方法を模索する＞」経験をしていた。そして、これらの経験から、「《会うことの重要性を実感する》」《目的や状況に応じ、協同方法を組み合わせる》」といった＜協同方法を提案する＞発言が述べられた。

表2. サロンの学び

カテゴリー(6)	サブカテゴリー(16)	コード(91)
サロンと出会う	サロンが何をやる所かを知る	・サロンについて初めて知った ・サロンがどうしているか、わかった 等
	身近にサロンがあることを知る	・身近にサロンが実施されていることを知る機会となった 等
サロンの側面を知る	サロンの企画を経験する	・サロンに来る人のニーズやサロンの抱える課題を、事前につかむことが難しかった ・お年寄りの好みが変わらなくて、どういふものを準備すればいいか、どういふものを準備すれば喜んでくれるのか考えることが難しかった 等
	サロンの企画に関わる困難を体験する	・サロンを運営している人のお話を聞いて、難しい点もあることを知ることができた ・(高齢者が)どこまで理解できるか予想するのが難しかった 等
サロンを知り当惑する	地域の人々と交流し反応を得る	・クイズの間に答えを出して盛り上がった時に、どこでできればよいかわからなかった 等
	知らないサロンの一面を知る	・施設ではなく、地域で暮らしているお年寄りと関わった ・企画に参加しない人を想定した配慮ができていなかった 等
サロンの意義を見つける	参加者の目線で考えるちがいが大切と感じる	・チラシの文章に「頭を使いましょう」と書くのが難しく思われるなど、文のニュアンスも影響する ・引きつけるキャッチフレーズが必要 等
	参加者に寄り添った企画を行うことが大切と感じる	・サロンが地域の方にとって楽しみの場所、高齢者と近所の人が交流できる場所となるものを考えたい ・昔の遊びを教えていただくことで、昔を思い出し、元気になっていただけるような企画をしたい 等
新しいサロンを提案する	町と向き合い、町の活性化を目指し継続する	・サロンでの企画を、1回ではなく続ける方が、企画の反省を活かしたり、アンケートをとって求められていることをやったりする方が、地域サロンらしくなる ・町おこしになるくらい、しっかりその町やサロンと向き合ったら、大変だと思うが、面白いものになるんじゃないか 等
	専門性が発揮できる企画	・今回はあまり、看護だ、社会福祉だという企画ができなかったので、自分たちの学んでいる専門性がわかるような企画をやってみよう 等
サロンを体験しての学び・思い	主体的に活動することの必要性を知る	・今回は、学生主体とはいっても、学生がやるべきことを教員やサロンの人にお任せしていた感じがする 等
	サロンへの興味が湧く	・自分の地元でこういうサロンがあるのかなという興味が湧いた
	経験・自信を得ることができた	・サロンという場での企画・実行を経験し、自信がついた ・自分から行動して人前に立つ初めての経験ができた 等
	地域の人々と交流ができた	・実際に(サロンを)実施してみても色々な人と様々な話ができ、コミュニケーションがとれた 等
	地域の人々から暖かい言葉をいただいた	・サロンが終わった後に、参加者から「楽しかった」と嬉しい言葉をたくさんいただいた ・参加者が「来てよかった」と笑顔で帰っていただけ、嬉しかった 等
サロン実施内容を振り返り感じた良い点と改善が必要な点	・ミニ知識を持って帰っていただけよかった ・事前に準備しきれない部分があった 等	

表3. 協同学習の学び

カテゴリー(7)	サブカテゴリー(14)	コード(105)
出会い前	看護学部への偏見がある	・看護学部生が、ぎつそうだなと思ひ、しゃべりづらさがあった
メンバーと出会う	お互いを知らないことへの不安がある	・最初は、同じ学部同士で話をしていた、違う学部同士では必要に応じて少し話すだけだった ・お互いを知らない状態で企画を進めていくことが大変だった
	お互いの強みを知る	・看護学部生は、専門的なことを知っている ・社会福祉学部生は、地域の特徴を捉え、参加者の特徴を考えるとがうまい
メンバーの側面を知る	企画と一緒に考える機会を体験する	・社会福祉と看護で、何か考え方や役割が違っていると思った ・同じ目的でも、看護と社会福祉おまじ目するところが違うと思った
	お互いの強みを実感する	・クイズの内容を考えるときに、看護学部生は、健康や身体の仕組みについての意見を出してくれた ・福祉の学生は参加者中心に考え、看護の学生が気づかない点に気づくことができた
協同学習に当惑する	協同する作業時間確保の難しさを感じる	・距離や、授業時間、曜日の違いで、集まって話す機会が限られていた ・キャンパスが異なるので、簡単に集まることできず、思うように作業が進まず、頼むことが多かった
	情報共有・均等な作業分担の難しさを感じる	・役割分担して当日持ち込むことにしていたが、お互いの進捗状況がわからなかった ・役割分担をすると、1人に負担がかかってしまった。お願いすることが多くなり、一緒にできたうよかった
協同学習方法を模索する	SNSは効率性がよいと感じる	・個人で作って持ち寄る場合は、LINEで連絡を取ると効率的かもしれない
	SNSを有効に活用できる	・SNSの動きを活発にすることが大事だと感じた
	SNSを利用し限界を感じる	・LINEで連絡を取っていたが、やっぱり直接あって話し合っ進める方がやりやすかったこともあった ・SNSでは、伝えることが難しい
協同学習方法を提案する	Win-Winの関係には、会うことの大切さに気付く	・SNSでは、実際に会っていないので、表情が見えない、誤解が生まれやすいのかと思う。直接あって、話ができればよかった
	会うことの重要性を実感する	・一緒に何かを作るなどの作業では、仲よくなる方がうまくいくし、作業を通して仲良くなれるので、会ってやる方がうまくいくと思う ・顔合わせ、最終チェックは会うことが必要。途中で、細かく話しておくことで、修正点が把握できたり、お互いどの程度進んでいるかわかる
協同学習方法を提案する	目的や状況に応じ、協同学習方法を組み合わせる	・顔を合わせられない、授業が合わない場合は、テレビ電話やSkypeを使う(方法もあると思う) ・一緒にすべきこと、役割分担可能なものを選別し、役割分担できるものはSNSを利用する
	協同学習だから得られた経験がある	・違う学部だからこそ、お互い高齢者と対応するときに気づけたほうが良いことがあるとアドバイスをし合えた。より深い理解ができた ・企画中に考えていたが、タイムスケジュールや時間のゆとり等、参加者中心に考える異なった視点が勉強になった

優れた成果が上がった点

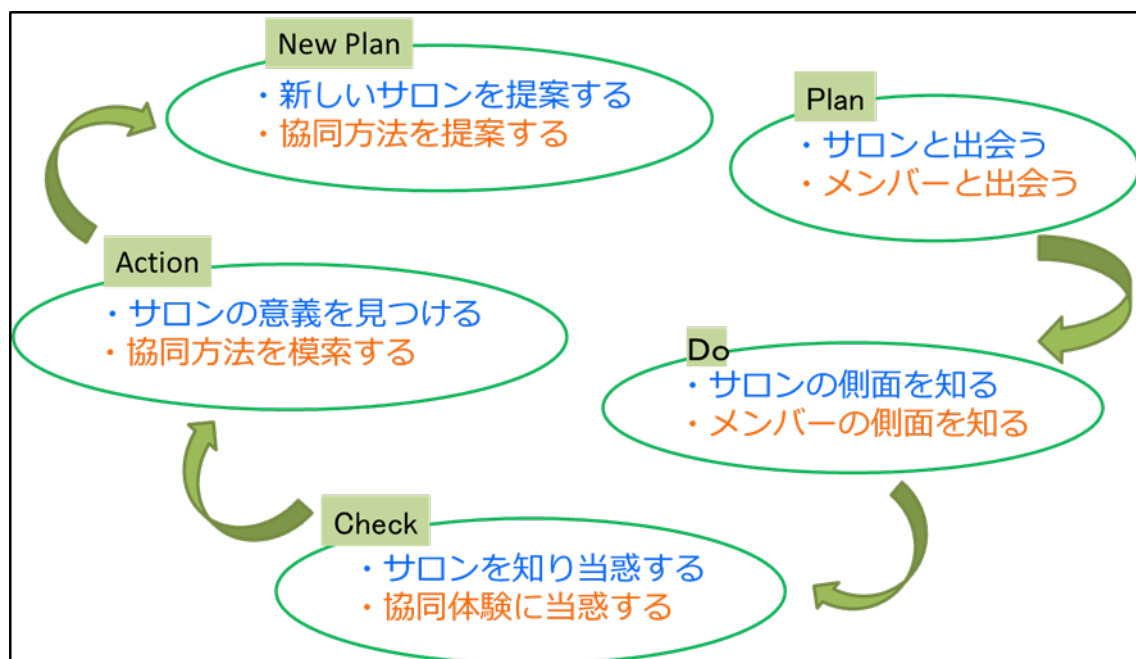
本プロジェクトの優れた成果は、以下の2点である。

2 学部で協同し、サロン活動を体験した学生から、サロンを継続していく必要がある、授業の一貫とし、大学が継続して実施できるようなシステムづくりを行う必要があるという言葉が聞かれた。これは、学生が本プロジェクトである『学生主体活動型地域サロン』に参加することで、①協働してサロンを企画・実施することに有用性を感じ、この活動を継続するための具体的方法を検討できたと考えられる。また、②『学生主体活動型地域サロン』に参加・企画・実施する過程で、以下の図1に示すようなPDCAの段階を踏み、相互の専門性を考え、協同について学びを深めることができたと考えられる。

学生達は、<サロンやメンバーと出会い>、そ

の後のサロンを企画・実施する計画や、協同で進める計画を立て【Plan】、実行していく【Do】過程で、出会いでは見えなかった<サロンやメンバーの側面を知る>体験をしていた。更に、進めていくことで、これまで見えなかった、あるいは思うように進まないことで<サロンを知り当惑する><協同体験に当惑する>体験から、何が問題であるか、どうするとよいのかを考え評価する機会となり【Check】、<サロンの意義を見つける><協同方法を模索する>体験に繋がり、行動へと結びついていた【Action】。協同によるサロンの企画・実施の過程を振り返ることで、課題に気づき、改善方法を検討し<新しいサロン・協同方法を提案する>ことができおり【New Plan】、『学生主体活動型地域サロン』の企画・実施の体験は、PDCAの過程を通して、学びを深められる学習の場となっていると考えられた。

図1. 協同でサロンを企画・実施した体験からの学び



研究期間終了後の今後の展望

本研究は、プロジェクト取組の初年度であったことから、『学生主体活動型地域サロン』の基盤づくりとして、学生が地域の人々と交流し、2 学部の学生が協同してサロンを企画し地域で実施した体験からの学びを明らかにすることを目的に行っ

た。その結果、学生は地域住民との交流ができ、この先、学生が地域でサロン等活動する基盤づくりを構築することができたと考える。

しかし、本プロジェクトの本目的である、地域住民の健康づくり・生きがいをづくりを行うためには、継続的な活動が必須である。継続的な活動を

行っていくには、上述したインタビュー結果から、**【協同学習できる環境づくり】**【**継続した活動を支援するシステムづくり**】を構築する必要があり、今後、大学全体で取組む必要性が示唆された。また、本プロジェクトを実施・遂行するには、学生だけではなく、教員間の連携も重要であった。本プロジェクトでの学部間交流は2学部のみであったが、教員間のスケジュール調整や情報共有は、決して容易とは言えなかった。今後、大学全体で同様のプロジェクトに取組む場合、更に困難が予測される。そのような状況を把握し、効果的な協

同学習を実施するためには、各学部**に IPE 担当教員が配置されることが必須である**と考える。また、**IPE 担当教員が、キャンパスを離れ IPE 教育に取り組むことができるような、学部内での協力・支援体制を整備していくことも必要である**と考える。

上記課題は、すぐに取り掛かる、あるいは解決できる課題ではないと考える。その間に、地域の人々との更なる交流や、今後、地域サロンで実施する企画の検討は可能といえる。現状において可能な範囲で、『**学生主体活動型地域サロン**』の継続に向け取組んでいきたい。